

2017 年度 (平成 29 年度) 学校評価自己評価表

向丘 中学校区	校番 8	福山市立向丘中学校
最終更新日	2018 年 (平成 30 年) 2 月 22 日	

I 福山市

ミッション	福山に愛着と誇りを持ち、変化の激しい社会をたくましく生きる子どもを育てる。
ビジョン	「福山100NEN教育」の基本理念のもと、各中学校区・学校が「21世紀型“スキル&倫理観”」の育成に向けた特色ある教育課程を編成し、日々の授業を中心として評価・改善を進めながら、子どもたちの確かな学びを実現している。

II 中学校区

前年度学校関係者評価の主な内容 ・協働学習等の組織的な授業実践により、学力が定着してきている。 ・家庭学習の定着に課題が残る。 ・教職員研修や地域とのかかわりは概ね良好である。 ・校区として中中共通の指標を設定し、高い目標値をめざして欲しい。	児童生徒の現状 ・分かり易く表現したり、他者の考えを受け入れて思考を深めたりすることが苦手な児童生徒がいる。 ・意欲を持続させ、粘り強く取り組む事が苦手な児童生徒がいる。 ・自己肯定感や自己有用感が低い児童生徒がいる。	育成する力 (21世紀型“スキル&倫理観”)	表現力, 課題発見・解決力, 情報活用能力, 主体性, 協調性・柔軟性, 自己理解, 郷土愛
		めざす子ども像 (義務教育修了時の姿)	人とのかかわり合いを大切にし、学ぶ意欲を持ち、自分の生き方を主体的に考える子ども ○校区の学力課題を分析し、自ら考え学ぶ授業づくりを推進する。 ○生活態度、規範意識について共通的・系統的な取組を推進する。 ○特別支援教育の視点を取り入れた授業づくりを推進する。
		中学校区として統一した取組等	

III 自校

ミッション 自校や郷土に愛着と誇りを持ち、他者とのかかわり合いを大切にし、自分の生き方を主体的に考え、粘り強く実践する生徒の育成する。	育成する力 (21世紀型“スキル&倫理観”)	課題発見・解決力	主体性	自己理解
	1年 2年 3年	物事を多面的に見たり、考えたりして課題を設定し追及している。 多様な視点を持って、課題を設定し、様々な方法で追及している。 多様な視点を持って物事を見つめ、課題を発見し、様々な方法で追及し課題解決している。	より高い目標を立て、よりよい解決に向けて取り組んでいる。 より高い目標を立て、よりよい解決に向け粘り強く取り組んでいる。 より高い目標を立て、他者と協働してよりよい解決に向け粘り強く取り組んでいる。	自分の長所や短所を理解し、自己の生き方を考えている。 自らの学びの有り様を理解し、よりよい生き方について考えている。 自らの学びや表現の有り様を理解し、よりよい生き方について考え実行している。
学校教育目標 『 自ら気づき、考え、創造し、実践する生徒の育成 』 校訓 【自律創生】	研究 教科等 主題・内容等	特別活動 課題発見・解決力, 主体性, 自己理解の育成 ～「すべ」を活用し自ら学び合う授業づくりを通して～		
現状 <生徒> ○学年や教科によって学力の定着状況にばらつきが見られる。また、思考力・判断力・表現力を問う活用力にやや課題がある。 ○家庭学習を1時間以上行う生徒は54%であり家庭学習の習慣に課題がある。 ○学級への貢献意識やボランティア活動の参加意識は高まりつつある。 ○挨拶・時間を守る・無言清掃の取組については、生徒の意識に温度差が見られ、成果が伸び悩んでいる。 ○新体力テスト実施状況や部活動の取組から、体力の向上に成果が見られる。 <授業> ○思考の「すべ」を意識させ、協働的な学びによる生徒の主体的な学習活動を仕組む授業づくりを行った。 ○集中して、積極的に授業に取り組むことに課題があり、学習意欲を高揚を図る授業改善を行う必要がある。	めざす授業の姿	○単元を通して、生徒自ら課題を見つけ粘り強く探究する授業 ○思考のすべ(比較、関連付け、分類等)を活用し、他者との協同的な学び合いの中で、自分の考えを整理したり、深めたりすることができる授業 ○授業の終わりや単元の終末において、学習を振り返り、自分の成長を感じることができる授業		

IV 目標・取組及び評価指標等の設定と評価

福山市立向丘中学校

年目	中期経営目標	重点	分類	短期経営目標	目標達成に向けた取組	評価指標	中間評価(10月1日)			最終評価(2月末)					
							□指標に係る取組状況	70%以上評価	達成評価	改善方策	□指標に係る取組状況 ◎短期(中期)経営目標の達成状況	70%以上評価	達成評価	総合評価	改善方策
1	探究する楽しさ、わかる喜びを知る授業づくりを推進し、「課題発見・解決力」、「主体性」、「自己理解」を育成する		新規	生徒に基礎的、基本的な学力及び活用的、探究的な学力を身につけさせる。	基礎の確認のための小テストを実施する。 定期テストにおいて学力調査の類題や思考力、表現力を問う問題を出題する。	○標準学力テストにおいて、全学年、全教科で全国平均を上回る	小テストの実施64%。定期テストへの思考力、表現力を問う問題は全教科で実施した。 「基礎・基本定着状況調査」では、広島県平均を下回った。	3	2	小テストは特に5教科の充実を図る。課題となった単元は、該当学年における指導の工夫を行うとともに、学力調査と同じ問題を使って定着を図る。	小テストの実施は5教科において83%であった。 各教科で授業の振り返りを行い、明確な目標のもと学習に取組む工夫を行った。 標準学力テストで1・3学年において全国平均を上回った。	3	2	3	5教科のドリル学習などを行い、短時間を活用し基礎的な内容の定着を図る。 課題となる単元の指導工夫と同じ問題を解く取組を行う。
		★	見直し	カリキュラム・マップにおける重点単元において、課題発見・解決学習に取り組み、授業力の向上を図る。	思考のすべ(比較、関連付け、分類等)を活用し、協働的な学び合いの場を作る。 自分の成長を感じさせるために、導入や振り返りを工夫する。	○生徒アンケート「話し合い活動を通じて、自分の考えを深めたり広げたりすることができる」と肯定的回答85%以上 ○「自分の考えと他人の考えを比較しながら聞いている」、「自分と違う考えを受け入れながら話す」の肯定的回答90%以上	思考のすべ、協働的な学び合いの工夫は86%の教員が強く意識している。 重点単元において単元指導について取組や計画を交流した。 生徒アンケートの平均は82%であった。	3	3	自分の考えをもたせ、発表時に他者の考えとしっかり比較できるようにする。 思考のすべを使った振り返りの文章を書かせる習慣をつける。 思考のすべが書かれたカードの活用を徹底する。	課題発見・解決型の単元開発に取り組み年2回のレポート交流研修を実施した。(8月、1月) 「話し合い活動を通じて、自分の考えを深めたり広げたりできている」88%であった。 思考のすべに係る生徒アンケートの取組は82%であった。	4	3	4	生徒自身が協働的な活動でより自分の考えが深まったと考える授業を授業者が仕組み、生徒の主体的な学びにつなげていく。
1	自ら創る楽しさ、友と伸び合う喜びを知る活動づくりの推進し、「自己肯定感」、「自己有用感」の高揚を図る。		見直し	生徒の主体性を引き出し、自らの思いを発信する表現活動を推進する。	特別活動(学校行事)の指導改善のための研修を行う。 学級集団づくりを基盤に、学年や縦割り集団づくりを行う。	○生徒アンケート「学級や学校の中で自分の力が役に立った」と感じる生徒80%以上	アンケート結果は67%であった。 3年生リーダーを中心とする縦割り集団作りを行った。リーダーへの事前指導や打合せが不十分であった。	2	2	新生徒会に対してリーダーとしての意識を育成する。 リーダーを支える役割の大切さを生徒に意識させる。	1、2年生において、生徒会役員選挙を機会として、学年リーダーを中心に自分たちの生活を見直す機会を設けた。 「学級や学校の中で自分の力が役に立った」69%であった。	3	2	3	集団のあるべき姿を生徒にもたせるように指導し、フォロワーの役割を生徒に意識させる。 班会議の内容を見直し、生徒の意見や気付きの良さを評価し学級活動への貢献を伝える。

		★ 新規	生徒の成長や努力を褒めて伸ばす取組を推進する。	学校、生徒会において新たな表彰を企画する。 授業や生活場面で、自分の成長を振り返らせる。	○生徒アンケート「自分には良いところがある」「自分の良さは周りから認められている」の肯定的回答80%以上	美化委員会、図書委員会で新たな表彰を実施した。行事ごとに振り返りを行った。アンケート結果の平均は73%であった。	3	3	できている生徒をほめることで、できていない生徒の模範とする。各学年、各教科等の取組を学校全体で交流し、教員の改善につなげる。	できている生徒を評価し、手本として示すことで、他の生徒の意識を高めるなどの工夫を、約6割の教員が行った。 「自分にはよいところがある」75%、「自分の良さは周りから認められている」70%であった。	3	3	3	各学年、各教科等の取組を掲示したり、交流したりすることで、学年、教科を超えた取組みが広がるように努める。
		新規	他者とのかかわり合いを大切にする意識を高める。	生徒会活動において、挨拶運動を活性化させる。 校内ボランティアの企画運営、地域ボランティアを奨励する。	○地域社会などでボランティア活動に参加したことがあると回答した生徒90%以上 ○あいさつのアンケートに係る肯定的回答を95%以上	生徒会執行部の生徒だけでなく、各種委員会の生徒も挨拶運動に参加した。ボランティアの参加は41%、あいさつは96%であった。	3	2	生徒に挨拶の声を届けるという意識を持たせる。校内外のボランティアを早めに計画し、参加しやすい環境を整える。	部活動単位で、溝に落ちた枯葉を集めるなどのボランティアをすすめた。 ボランティアの参加は46%、あいさつは93%であった。	3	2	3	生徒会でボランティアを企画し、表彰等を行うことで意欲を喚起すると同時に、人の役に立つことの素晴らしさを伝える。多様な集団であり、あいさつ運動を行い、「あいさつを大切にする」学校の気風をつくる。
1	落ち着いた学習環境づくりの推進し、生徒の学びを支える。	新規	特別支援教育の視点を取り入れたユニバーサル・デザインの授業づくりを行う。	掲示物の精査、机・ロッカーの整理整頓による教室環境づくり 3分前行動、1分前着席に取り組み集中して授業を開始する 生徒にわかりやすい板書を工夫する。	○生徒アンケート「落ち着いて(集中して、積極的に)授業に取り組んでいる学級」の肯定的評価70%以上	教室ロッカー上にブックスタンド等を置き整理整頓ができる環境を整えた。9割以上の生徒がチャイム席を守っている。アンケート結果は71%であった。	4	3	1分前着席で学習係活動を行う。その後、チャイムと同時に授業の導入部分へ入ることができるように取り組む。また、1時間の授業の流れを生徒に示し、授業に見通しを持たせる。	3分前行動、1分前着席の取組を継続した。 1時間の授業の流れを生徒に示し、授業に見通しを持たせた。 生徒アンケートの結果は65%であった。	4	3	3	教員の呼びかけがあって、行動を始める生徒が多い。3分前行動1分前着席を主体的に行うことができるように呼びかけていく。
		見直し	生活習慣(無言掃除)の定着を図る。	掃除用具の準備と掃除方法の指導を徹底する。 生徒会委員会	○生徒アンケート「掃除をまじめに頑張る学級です」の肯定的回答80%以上	年度当初、執行部による掃除指導を行った。アンケート結果は	3	3	無言掃除の意味、方法を具体的にもう一度、呼びかける。	美化委員によりトイレ掃除の仕方の説明を行い、具体的方法	3	3	3	全校挙げての無言掃除徹底キャンペーンなど、生徒会活動を活

				活動の活性化を図る。	上	80であった。			美化委員会でトイレ掃除について取り組む。	をポスター掲示した。 「掃除をまじめに頑張る学級です」76%であった。				性化し、表彰活動を行うなど、生徒の掃除に対する意識を高める取組を行う。
	★ 新規	いじめ・不登校の早期発見と早期対応を図る。	学期始まりと学期途中で教育相談期間を設定する。 連続3日以上、月5日以上の欠席者について保護者連携を行う。	○生徒アンケート「人が困っているときは、進んで助けている」の肯定的回答93% ○長期欠席者(30日以上)を前年度比3割減		1学期途中と2学期始めにいじめアンケートと教育相談に取り組んだ。 アンケート結果は88%,長期欠席者は前年度同月比で2割減であった。	4	3	係活動や班活動等で、生徒同士の協力を促すとともに、リーダーだけでなく協力者の大切さに気付かせる。 長期欠席者に係る取組については早期対応を意識し、教員間の連携を密にする。	SCから気になる生徒への声かけの方法を学び、指導に活かした。 「人が困っているときは、進んで助けている」90%であった。 長期欠席者は前年度比1割削減であった。	4	3	3	引き続き、生徒の悩みや人間関係のトラブルを早期発見できるよう教育相談体制を整えるとともに、保護者、関係機関と連携しながら早期対応を行う。
3	積極的な情報発信による保護者満足度の向上を図る。	継続	重点取組の内容や状況を積極的に発信する。	学校だより等において、学校の取組を紹介する。 「くまが峰」により小中一貫教育の取組を紹介する。	○保護者アンケート「通学させてよかった」「学校が楽しい」「安心して学校に通っている」の肯定的回答100%	学校だより、くまが峰、HPで学校の取組を紹介した。 アンケートの平均は93%であった。	3	3	生徒をほめて伸ばすことを継続し、探究する楽しさや分かる喜びを知る授業づくりを推進する。	学校だよりにおいて 校区合同研修、校区あいさつの日、校区合同清掃などの取組を紹介した。 保護者アンケート、85~91%であった。	3	3	3	良い取組や生徒ががんばっている様子の紹介を引き続き行うとともに、生徒をほめて伸ばす取組を継続する。

[プロセス評価の評価基準]

評点	評価基準
5	取組の目的に対する共通理解が顕著に認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決が十分に図られた。
4	取組の目的に対する共通理解が認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決が概ね図られた。
3	取組の目的に対する共通理解が一定程度認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決がある程度図られた。
2	取組の目的に対する共通理解が認められ難く、状況の変化、問題が生じた際の協同的な課題解決があまり図られなかった。
1	取組の目的に対する共通理解が認められず、状況の変化、問題が生じた際の協同的な課題解決が図られなかった。

[達成評価の評価基準]

評点	評価基準
5	目標を大幅に達成し、十分な成果をあげた。
4	目標を概ね達成し、望ましい成果をあげた。
3	目標をある程度達成し、一定の成果をあげた。
2	目標を下回り、成果よりも課題が多かった。
1	目標を大きく下回り、成果が認められなかった。

[総合評価の評価基準]

評点	評価基準	
5	100%以上の達成度	十分に目標を達成できた。
4	80%以上100%未満の達成度	概ね目標を達成できた。
3	60%以上80%未満の達成度	ある程度目標を達成できた。
2	40%以上60%未満の達成度	あまり目標を達成できなかった。
1	40%未満の達成度	目標を達成できなかった。